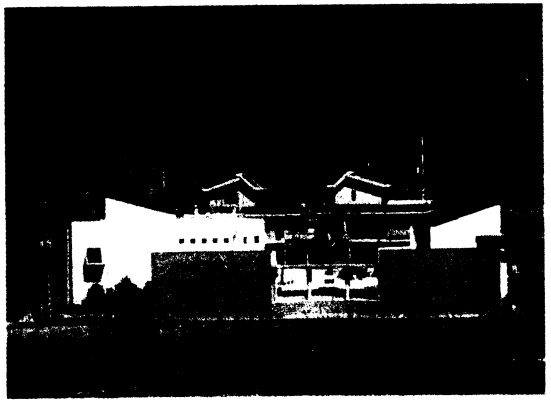
ISBN4-7601-2252-4

C0021 ¥2000E

定価（本体2,000円＋税）

9784760122523

1920021020001



つづき ☎048-2424

横浜市立図書館

2027754620

ナヌムの家歷史館ハンドブック

나눔의 집

ナヌムの家歷史館後援会

210.7

ナヌムの家歷史館ハンドブック

나눔의 집

ナヌムの家歷史館後援会＝編

柏書房

初年配の将校の相手をさせられた。まだ生理も始まっておらず、想像を絶する苦痛を受けたうえ、あふれる血を見て叫んだハルモニを見て、彼は胸倉をつかんで押さえつけながら殴ったり蹴ったりした。そのとき頭を殴られたのが原因で膿(うみ)が出るなど長い間苦しめられ、いまもそのときの傷跡が残っている。

その後はひとつの部屋があてがわれ、1日に7、8名の兵士の相手をさせられた。しかし、暴力は止むことなく続いた。慰安所に来た翌年の春に腸チフスにかかり、高熱が続き、食事も摂れなくなってしまった。軍は他の人に移されることを恐れ、ハルモニを焼き殺してしまおうと考えたらしい。1945年初夏の頃、軍人に連れられ車に乗せられて山のふもとに行くと、すでに薪(まき)を積み上げ、火を燃やしていた。しかしそのとき、朝鮮人たちが日本の軍人と乱闘のすえ、ハルモニを背負って逃げた。

逃亡後、ある朝鮮人の家に預けられ、そこでしばらく養生した後、ある朝鮮人男性と結婚した。1女をもうけたが、その後朝鮮戦争がはじまり、中国人民志願軍として参戦した夫は戦争で死亡、娘も3歳ぐらいで病気で死んでしまった。19歳のときだった。朝鮮戦争時は、(中国人民)解放軍の看護婦として働き、戦後も中国吉林の病院で看護婦として勤務しながらひとりで暮らしてきた。

30歳を過ぎて中国人と結婚するが、夫の浮気などが原因で1962年、故郷に帰ろうと子どもを背負って平壌(ピョンヤン)まで行った。しかし、軍事境界線に阻まれて故郷には帰れないことがわかり、再び中国に帰った。このため、しばらくスパイの疑いをかけられた。

その後夫とは離婚、46歳で退職し、吉林市で年金生活を送っていた。2男1女がいる。数年前、「ナヌムの家」が推進する帰国事業のことを知り、何回かの祖国訪問を経て息子とともに帰国を果たした。2000年4月にナヌムの家に入居、同年10月には国籍回復も実現した。

現在、高血圧と糖尿病を患っており、白内障の手術も受けた。「慰安婦」生活の後遺症で、今でも頭痛に悩まされ、緊張すると身体がぶるぶる震えたり、鼻血が出るなど、心と身体に負った傷の深さを物語っている。また、入居当初は「ナヌムの家」での生活になじめず、何日間も家を空けたりしていたが、現在では得意の「餃子」や中国料理をふるまったり、韓国語が不自由で耳の遠い池石伊(チドリ)ハルモニの面倒を見るなど、なごやかに過ごしている。

◉ナヌムの家で暮らしていたハルモニ

金福童(キムボクトン)ハルモニ

慶尚南道梁山(キョンサンナムドヤンサン)で1926年5月1日、6人姉妹の4番目として生まれる。15歳になった1941年のある日、村の区長と黄色い服を着た日本人が家にきて、息子がいないのなら娘でも挺身隊に差し出さなければならないといった。母が挺身隊とは何かと尋ねると、軍服工場で働き、3年したら帰ってこられると言って無理に書類に判を押させた。

そうしてハルモニはバスで釜山に連れていかれ、他の地方から連れてこられた結婚前の20名くらいの女性とともに倉庫に監禁された。ハルモニを連れにきた日本人と、日本に長く住んだという通訳の朝鮮人がハルモニたちを引率し、下関を経て台湾に連れてきた。そこでハルモニたちはモンペに着替えさせられ、言われたとおりの手紙を書いて親に送った。再び貨物船に乗せられ着いたところは広東だった。ハルモニたちは衛生病院に連れていかれ強制的に性病検査され、ある建物に連れていかれた。そこは悪夢のような日々が始まる慰安所だった。建物の真中に廊下があり両側に部屋があった。ハルモニたちは番号と「慰安婦」の名前が書いてある部屋をあてがわれた。部屋は狭く木の寝台が1つあるだけだった。隣とはベニヤ板で仕切ってあるだけで息遣いまで聞こえた。ハルモニたちは慰安所からは外にでられず、引率してきた日本人と朝鮮人が門の前で監視していた。その日の昼、軍医がハルモニの部屋に来て逃げるハルモニを捕らえ、すごい力で頬(ほお)を殴った。怖くて抵抗する力も失せ、なすがままになったが、初めてのことで怖くて震えがとまらなかった。性器から血が出て裂けるように痛く腫れ上がった。小水も出なかった。死のうと思い手に入れた白乾児(パイカル)酒を飲んだが見つかって胃を洗滌され死ねなかった。それが原因で3カ月間も食事がまともに出来ず、今も胃が悪く苦しんでいる。

ハルモニたちは1日に15人程度、週末は50人を超える男を相手にしなければならなかった。名前も「カネムラ・フユコ」または「ヨシコ」と日本名をつけられた。性病検査は1週間ごとに定期的にさせられた。しばらくして急にトラッ

クに乗せられ今度は香港、それからまた今度はシンガポールに連れていかれた。とても暑く大砲の音が常に聞こえた。その後スマトラ、インドネシア、マレーシア、ジャワへとハルモニたちは軍隊とともに移動を続けた。休み時間が少しでもできればハルモニたちは集まって泣いた。

急に軍人たちが来なくなり、しばらくすると日本軍人が赤十字の車に乗ってきてハルモニたちをシンガポールにある第10陸軍病院に連れて行った。そこで日本が負けたことを知った。そこで看護訓練を受け、病院で働いた。ある日、いとこと結婚した男性が尋ねてきて、その人のお陰でハルモニたちは米軍収容所に行き、最後の帰国船になんとか乗って釜山に帰り着くことが出来た。5年ぶりの故郷だった。ハルモニは体を酷(ひど)く壊していて療養に1年かかった。体調が戻ったら母が嫁にいけと哀願した。仕方なく母に看護婦でなく「慰安婦」をしていたと告白すると、母は慟哭(どうこく)し心臓を患うようになった。

母の願いで結婚はしたがうまくいかず離婚して、その後再婚したが夫も亡くなり一人暮らしをした。

金福童ハルモニは、「日本軍『慰安婦』歴史館」の開館の計画が募金などの問題で1998年3月から8月に延期されたとき、「歴史館」のためにと1000万ウォン(約100万円)を寄付金として提供した。また、開館の際は次のような挨拶のことばを寄せている。

「多くのハルモニたちが、“恨”を解かずに死んでいきました。私たちがどれだけ日本の犠牲になったかを子どもや学生が知り、“恨”を解いてほしい。二度とこのようなことが起きないように、学んでほしい。あなたたちがこのようになってはいけない」

李容女(イヨンニョ)ハルモニ

1926年2月10日、京畿道驪州(キョンギドヨジュ)郡で5人兄妹の長女として生まれる。

一家はたいへん貧しく、8歳のころから奉公に出る。11歳のときに家族とともにソウルに出て来て製菓工場などで働くが、14歳のときから1年ほど奉公していた家の女主人に「日本でお金をたくさん稼げるところがあるから行ってみないか」と持ちかけられる。結局、その女主人の言葉に騙され、1942年、汽車で釜山まで行き、そこから船に乗り台湾・シンガポールを経てビルマ(ミャンマー)のラングーン(ヤンゴン)に連れて来られる。着いた先は、日本ではなかった。

ラングーンからは汽車に乗り、ある村まで行き、そこで「慰安婦」生活が始まった。50人ほどの慰安婦がいた。そこでは「原田容女」と呼ばれた。1年ほど経った後、今度は山奥の村まで移動させられる。食事も満足にできず、故郷恋しさに気が変になってしまい、6カ月ほど狂ったかのように徘徊しながら過ごしたこともあった。慰安所には、将校に連れ出され同居生活をしたり、病気で亡くなったり、逃げ出したりする女性たちもいて、「慰安婦」は最終的には20人ほどになっていた。

軍人たちが、やって来るときには名刺ほどの大きさの票を置いていったという。それを集めると、通常1日に10枚から15枚、多い日は20枚ほどになった。週に1度ずつその票を集め、事務所へ持って行った。そこで計算され、貯金されているという話を聞いたが、通帳があるのかどうかについて、知ろうとは思わなかった。

ある日、軍人が全く来なくなった。戦争が終わったのだ。どこから来たのか朝鮮人の男性たちが現れ、「慰安婦」の女性たち全員をそこから連れ出した。そして一行は山奥の村から歩いてラングーンまでやって来た。ラングーンの収容所では、朝鮮人たち——徴用で来た男性たちと日本軍「慰安婦」たち——は、ともに生活した。各地から集まって来た女性たちが50人ほどいた。

解放の翌年の1946年3月、故国に帰って来た。その後は、食堂で働いたり家政婦などをしながら、やっとのことで生計を維持してきた。結婚する気にもなれず、朝鮮戦争のときに知り合った17歳年上の男性の同居人として暮らしたが、57歳のとき、その男性に死なれた。子供は産めなかったので、その男性の息子を養子として引き取り、一緒に暮らした。

ナヌムの家の初期から入居しはしたが、ほかのハルモニたちと気が合わなかったため、ナヌムの家がある京畿道広州(クアンジュ)で一人暮らしをしたりした。現在の「ナヌムの家」の建築の際には、工事をする人夫たちをさまざまに励ますなどその完成のために尽力した。1996年末からは念願だった息子の家で暮らしたり、1999年年末から2001年春まで「ナヌムの家」に戻ってきて生活したこともある。